

企画展
日本画家 せつこく ぼくせん **島田雪谷・墨仙親子**

- 会場 1階 松平家史料展示室
- 会期 令和6年3月16日(土)
～令和6年5月6日(月・休)
- 休館日 4月12日(金)

福井藩では、一時期をのぞいて狩野派の二家（狩野家・奈須家）が御用絵師として召し抱えられていましたが、江戸時代後期には画技の衰えが批判され、活動の実態も不明です。そのような中、絵画を得意とした藩士らも藩邸や藩主の御用を勤めており、16代藩主松平春嶽に絵画指導をしたという島田雪谷もその一人です。雪谷は明治以降も画塾を開いて多くの門弟を抱えました。雪谷の教えを受けた門人のなかでも、雪谷の次男・墨仙は自らの作風を作り上げ、中央画壇で高く評価されました。

本展では、幕末明治期の福井画壇に影響を与えた雪谷と、明治から戦前まで中央画壇で活躍した墨仙の作品を紹介します。

【島田雪谷】 (文政9/11年～明治17年・1826/28～84年)
 名：広意 通称：範左衛門・多司摩・雪谷 号：雪谷・青涯

島田雪谷は、福井藩の下級家臣（切米十八石三人扶持）の家に生まれました。雪谷は文武に鍛錬を重ね、「武」では槍の名手として、「文」では特に絵を得意としました。絵は、14、5歳頃から同じ福井藩の下級家臣で四条派の絵を描いた岩尾雪峰（1808～52年）に学び、続いて福井を訪れた長州（現山口県）の南画家磯西涯に南画を学びました。20代前半には、幕末の京都画壇で人気のあった四条派の絵師・横山清暉（1792～1864年）にも師事し、度々京都を訪問、古画を学んでその技量を高めました。

雪谷は四条派作品には「雪谷」、南画には「青涯」と署名し、第1回内国絵画共進会（明治15年）に円山四条派部門と南画部門の両部門に出品するなど、二つの流派の作品を描き分けました。雪谷の元には多くの入門者が集まり、幕末明治前期の福井画壇で大きな役割を果たしました。



桜花群禽図 島田雪谷筆
 (福井市春嶽公記念文庫
 ・当館蔵)

【島田墨仙】 (慶応3年～昭和18年・1867～1943)
 名：豊 号：華堂・雪信・墨仙

島田墨仙は島田雪谷の次男として福井城下に生まれました。墨仙は最初父から四条派を学び、その没後に一時洋画も学びました。明治29年（1896）に上京し、橋本雅邦に入門すると、中国の仙人や歴史上の人物を主な題材に選びました。有職故実や漢籍を学び、題材にする人物や故実を研究し、その人物の心情や精神性を描こうとしました。

墨仙は歴史人物画の大家として評価され、昭和18年（1943）、「山鹿素行先生」で日本画部門初の帝国芸術院賞を受賞しました。



加藤清正公 島田墨仙筆
 (当館蔵)

主要参考文献

- 『越前人物志』福田源三郎 思文閣 明治43年
- 『墨仙自叙伝』『国画』3巻8号～11号 昭和18年
- 『日本美術年鑑 昭和19・20・21年』国立博物館 昭和24年
- 『島田墨仙』福井県立美術館 平成23年

島田雪谷・墨仙略歴

和暦（西暦）	関係事項（年齢は数え年）	出典
文政9/11年 (1826/28)	雪谷、誕生。	※
天保11年(1840)～	雪谷、岩尾雪峰に絵を学び、その後、南画家・磯西涯(長州出身)からも学ぶ。	『越前人物志』
弘化5・嘉永元年 (1848)頃	雪谷、福井に立ち寄った横山清暉に絵を学び、その後度々京都へ赴き、指導を受けるとともに、古画の模写研究に努める。	『国画』3-10
	雪谷、隣家(常盤町・現春山)の橋本左内に絵を教える。	『国画』3-10
	雪谷、20～30歳ごろ藩主松平春嶽に絵を教える。	『塔影』13-1
嘉永7年(1854)	雪谷、兄の跡を継いで、家督を相続。通称を範左衛門とする(明治3年多司摩に、明治5年雪谷に改める)。	『旧藩制役成』 『福井藩士履歴』
万延元～文久2年 (1860～62)頃	雪谷、父母と北陸遊歴中の野口小蘋(後に帝室技芸員)に絵を教える。	『国画』3-8
万延2・文久元年 (1861)	雪谷、絵馬「酔李白」(大瀧神社)を制作。 この頃、雪谷、武生藩米澤家女照子と結婚。	『国画』3-8
元治2・慶応元年 (1865)	雪谷長男・雪湖誕生(幼名範九郎、後に甫)。	『国画』3-9
慶応3年(1867)	雪谷次男・墨仙誕生(幼名豊作、後に豊)。	『国画』3-10
明治9年(1876)	墨仙、この頃から父について絵を学ぶ。	『日本美術年鑑』
明治15年(1882)	第1回内国絵画共進会に雪谷は円山四条派部門と南画部門に、雪湖は円山四条派部門にそれぞれ出品。雪湖は第2回内国絵画共進会(明治17年)にも出品。	『明治美術基礎資料集』
明治17年(1884)	雪谷没(57/59歳)。 墨仙、在籍していた福井中学校を退学し、陸軍士官学校を受験するも視力不十分により不合格となり、絵の勉強を決意する。雅号は華堂、後に雪信。 福井中学校教員小林寿、大平広正から西洋画を学ぶ。	『越前人物志』 『国画』3-9 『国画』3-10
明治18年(1885)	墨仙、福井中学校等で代用教員となり、明治28年まで教壇に立つ。	『国画』3-10 『島田墨仙』
明治29年(1896)	墨仙、上京し橋本雅邦に入門、雅号を墨仙と改める。墨仙、故実を川崎千虎に、漢学を信夫恕軒に学ぶ。	『国画』3-11
明治30年(1897)	墨仙、日本絵画協会第3回絵画共進会に出品した「致城帰途」で銅賞受賞、パリ万国博覧会(1900年)にも出品される。	『国画』3-11 『千九百年パリ万国博覧会臨時博覧会事務局報告』上
明治31年(1898)	墨仙、福島県立第二尋常中学校の図画・習字の教員となり、明治39年まで福島で教壇に立つ。	『日本美術年鑑』
明治39年(1906)	墨仙、福島を離れ上京し、以後絵画制作や画壇での活動を精力的に行う。	『日本美術年鑑』
明治43年(1910)	墨仙、橋本左内銅像の肖像画制作を福井市より依頼され、下絵を制作し試行錯誤の末、大正3年(1914)に完成する。	『塔影』11-9
明治45・大正元年 (1912)	雪湖、アメリカから帰国する船中で亡くなる(48歳)。	『国画』3-9
大正11年(1922)	墨仙、越前松平家18代当主松平康莊から明治神宮絵画館献納の「王政復古(小御所会議)」制作の依頼を受ける。昭和6年(1931)完成し、奉納される。	『壁画謹写の記』
昭和10年(1935)	墨仙、景岳会から依頼され「橋本左内肖像画」制作。	『日本美術年鑑』 『塔影』11-9
昭和17年(1942)	墨仙、第5回新文展に「山鹿素行先生」出品、翌年帝国芸術院賞を受賞する。	『日本美術年鑑』
昭和18年(1943)	墨仙、没(77歳)。	『日本美術年鑑』 『国画』3-8

※『越前人物志』『塔影』13-1号『国画』3-9号の記述をもとにすると文政11年生まれとなるが、『国画』3-8号で墨仙が雪谷は文政9年生まれと述べている。

次回の展示

企画展 子どものきもの～健やかな成長を願う～
令和6年5月11日(土)～7月7日(日)

展示解説シート No.166 令和6年3月16日発行
福井市立郷土歴史博物館 〒910-0004 福井市宝永3-12-1
電話 0776-21-0489 Fax 0776-21-1489
担当：藤原千穂 印刷/宮本印刷